
ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

こた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

【Nコード】

N2548Y

【作者名】

こた

【あらすじ】

いつものようにソニックとエッグマンは戦っていた。ソニックが七つのカオスエメラルドを使いスーパーソニックへ変身し、誰もが勝負はついたと確信した…

しかし、異変は起こった。

突然暴れ出し、ソニック達を攻撃するカオスエメラルド。一体カオスエメラルドになにが起こったのか？

ソニック達の新たな冒険が始まる！

■キャラクター紹介■（前書き）

ソニックをご存知ない、もしくはあまり詳しくないお方もいらっしゃると思うので、一応キャラ紹介をします。

■ キャラクター紹介 ■

【ソニック・ザ・ヘッジホッグ】（主人公）

種別 ハリネズミ

年 15歳

□ 特徴

- ・ 全身が青い
- ・ 大きな白い手袋
- ・ 赤いスニーカー
- ・ 大きなトゲ（数本）

□ 特技

- ・ 超音速で走ること
- ・ スーパー化

（スーパー化とは、七つ集めると奇跡を起こすと言われている「カオスエメラルド」のパワーを取り込んでパワーアップすること。通常時を遥かに超える能力を有し飛行も可能だが、極端にエネルギーを消費するため短時間しかスーパー化を維持することが出来ない。）

自由気ままが大好きで曲がったことが大嫌い。短気なところがあるが、困っている人は放っておけない優しさを持つ。約束は守り、絶対に裏切らない。ただし、じっとしていることや水は苦手という欠点もある。

【マイルス・パウアー】（通称 「テイルス」）

種別 キツネ

年 8歳

□ 特徴

- ・ 全身が黄色い
- ・ 大きな白い手袋
- ・ 大きな2本の尻尾

□ 特技

- ・ 尻尾を回転させて飛ぶ
- ・ 機械いじり

心優しい子ギツネ。過去に尻尾が二本あることでいじめられていたが、ソニックの走る姿を見て勇気づけられ、彼の後を追いかけることになった。機械いじりが大好きで、その能力を活かしソニックをサポートする。

【ナックルズ・ザ・エキドゥナ】

種別 ハリモグラ

年 16歳

□ 特徴

- ・ 全身が赤い
- ・ 手が大きく、手の甲に二本のトゲが付いている

□ 特技

- ・ 穴掘り
- ・ 壁登り
- ・ 滑空

ソニックの喧嘩友達で良きライバル。「マスターエメラルド」という不思議な力を持つ大きなエメラルドの守護者。生真面目であるため、よくエッグマンに騙されることも。トレジャーハンターでもある。彼の拳は強力で、大きな岩も軽々と破壊できる。

【Dr・エッグマン】

種別 人間

年 不明

□特徴

- ・ 体型が卵の様に丸い
- ・ 目に小さく丸いサングラス（と思わしきもの）をかけている

自分勝手にわがままな「自称」悪の天才科学者。IQ300と高い知力を持つが、人の迷惑を考えない。何度も計画をソニックに阻止されている。

【シャドウ・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 不明

□特徴

- ・ 全身が黒い（赤い箇所もある）
- ・ 見た目がソニックと瓜二つ
- ・ 走る時は地を蹴って走るといふより、靴から出る空気でスケートの様に滑走する様に走る。

□特技

- ・ 音速で走る
- ・ カオスコントロール
- ・ カオスブラスト
- ・ カオススピア
- ・ スーパー化

「Dr・エッグマン」の祖父にあたる世紀の天才科学者「プロフェッサー・ジェラルド」によって生み出された究極生命体。「カオス

エメラルド」を使い、時空を歪ませることが出来る『カオスコントロール』の力を与えられている。

【シルバー・ザ・ヘッジホッグ】

種別 ハリネズミ

年 14歳

□ 特技

- ・ 超能力を使って物を動かし、それを投げて攻撃できる
- ・ ESPによる飛行
- ・ スーパー化

荒廃した未来を変えるべく、未来からやって来たハリネズミ。様々なサイコネシスを使う。

【ダーク・ザ・ヘッジホッグ】（オリキャラ）

種別 ハリネズミ

性別 男

年 ？

今回の事件の主犯。カオスエメラルドを操る能力を持つ。シャドウの行方を追っているが、目的は不明。

【ハイク】（本名は不明）（オリキャラ）

種別 ハリネズミ

性別 男

年 ？

朱色の体を持つハリネズミ。見た目はソニックと少し似ているが、頭に大きな毛が立っている。（本人は少し気にしている。）記憶を失っているが、正義感が強く熱い。銃使いであり、その腕前はかなりのもの。ただし、ムキになると危険な銃弾を使うが本人はそれを危険と感じない。また、なかなかの俊足。

【エミー・ローズ】

種族 ハリネズミ

性別 女

年 14歳

「自称」ソニックのガールフレンド。今回もソニックを追いかけているが……。

■キャラクター紹介■（後書き）

□参考 ソニックチャンネル（公式HP）

プロローグ（前書き）

はじめまして、こたと申します。
初投稿です。

登場キャラ

ソニック、テイルス、ナックルズ、エミー、エッグマン、シャドウ、
シルバー、ハイク（オリキャラ）、ダーク（オリキャラ）

こんな感じです。よろしく願います？

ブローグ

見渡す限り広い草原が広がっている――

草原の真ん中で「彼」は昼寝をしていた。

太陽が少し眩しい。

だが、そよ風が心地良い。

近くで小河が流れている。

水の流れる音が心を静かにする。

チチチ――

小鳥のさえずりが聞こえる。

なんて……平和なんだろう……

穏やかな表情を浮かべ、「彼」は目をつぶりながらそう思っていた。

「彼」は朱色の体をしており、背中には数本の大きなトゲがある。
また二本の大きなベルトを身に付けており、片方は腰に、またもう
片方は無造作に肩にかけていた。

大きな草が生えているところで、「彼」は少しウトウトしていた…

その時

「ん……？」

空で起きている小さな異変に気づき、「彼」はゆっくり目を開ける。

「……！？」

「彼」は驚いて体を起こした。

少し目を疑った。

「彼」の寝ている場所だけ日陰になっている。

しかし空に雲は一つもなく、周囲にもその要因となるような物はな
かった。

「な……なんだこれ……」

「彼」は小さく呟いた。

その時空に気配を感じ、「彼」は空を見上げる。

「違う……シャドウ・ザ・ヘッジホッグじゃない……」

どこからか不気味な声が聞こえた。

「誰だっ!？」

「彼」は空を見上げたまま腰のベルトに装着していた拳銃二丁を取り出した。

「……まあいい、教えてやろう……」

シューウウウウウウウウウ……!!

声のする方に禍々しい黒い煙のようなものが集まった。

鳥達はこの存在に気がついたのか、皆飛び去っていった。

その煙はだんだん一匹のハリネズミとなった。

そのハリネズミはゆつくりと地上に降り立つ。

サクッ――

草を踏む音が少し大きく聞こえた。

「俺の名は……ダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世の唯一にして究極の存在……」

静かな物腰でこそあるが、海の底のように冷たい群青の瞳と漆黒で背中に悪魔のような翼の生えた体を持つハリネズミ――ダークは不敵にそう言い放った。

「……あんたが俺に何の用だが知らないが……究極の存在だって？ ハッ！ 笑わせるな。悪いが俺にはあんたが究極の存在だなんてちっとも思えないね。」

チャキッ！

「彼」はダークに二丁の銃を構えながら言った。

「……貴様に用は無い……だが、折角だ。俺が究極の存在である証拠を見せてやろう。」

ザッザッザッザ……

ダークは不気味な微笑みを顔に浮かべながら、「彼」に向かってゆつくり歩き始めた。

「来るな！」

ダンッ！ダンッ！！

「彼」はダークに銃を撃った。

ビシッ！ビシッ！！

「なっ……！！！」

弾は当たったが、ダークは表情一つ変えずに近づいてくる。

「これならどうだっ！」

ジャキッ！

「彼」は一旦銃を下ホルダーに戻し、背中から先程の銃よりも数段威力の高いグレネードランチャーを取り出した。

「行っけえ——!!」

ドンッ! ドンッ! ドンッ! !!

「彼」はダークに向かってグレネードを三発撃った。

ドガ——ン!!

グレネードはダークに命中し爆発した。

その衝撃で周りの草が燃えているのが分かる。
しかし、ダークの姿は噴煙で見えない。

シュ~~~~ッ
……

煙が大分引いてきた。

「……っ な！なんだとっ！！？」

「彼」は自らの目を疑った。

彼の周囲こそ惨状と化していたものの、ダーク本人は無傷だった。

「くっ、くっそお——！！」

ダッ！！

「彼」は走り出した。

「俺の足の速さをなめるなよ！！お前なんかには追いつけるものか！！」

「彼」は走りながら振り返った。

「……っ な！？」

さっきまでダークが居た場所にダークは居なかった。

「言っただろう…？この世の絶対にして究極の存在だ…と。」

「！？」

「彼」は正面に向き直った。

そこには片手を「彼」に向けているダークが居た。

「やつ、やばい！！」

このスピードだと止まらない！！——

ダークの手に紫色の光が集まる。

「……とどめだ。」

ドンッ！！

ダークの手から黒い閃光が迸った。

ズガアッ

「うわあああああつ！！！！」

「彼」はビームに直撃し、空中に投げ出された。

ドザッ！！

「彼」は地面に叩きつけられ、意識を失った。

「……フン。」

蔑むように嘲笑うとダークは姿を消した。

「……っ……」

太陽が西へ沈もうとしているとき、「彼」はようやく目を覚ました。

「彼」はよろよと立ち上がった。

「ガッ!!?」

全身についた傷が痛み、「彼」は倒れかけた。

「……」は……どこだ……?」

SONIC VS EGGMAN

ドガンー!!

ヒュ~~~~~: ドーン!!!

何発もの爆音が響く。

ここは自分勝手にわがままな「自称」悪の天才科学者、Dr・エッグマンが作った基地の中だった。

基地の中は昼間であるにも関わらず、少し薄暗く感じられた。基地内の司令塔のような大きな建物が不気味にそびえ立っている。

名前の通り卵のような体をしているエッグマンは、毎度のように自分が作った大きなロボットに乗り「彼」を追いかけていた。

「待~~~~え~~~~!!」

エッグマンはロボットを操縦しながら叫ぶ。

「COME ON!!」

「彼」——ソニックは走りながら言った。

音速で走り回る青いハリネズミ——ソニック・ザ・ヘッジホッグ。大きな白い手袋と赤いスニーカーが特徴的な彼は、何度もエッグマ

何かがロボットを攻撃した。

「ソニックー!!」

ブ~~~~ン!

その正体は愛機・トルネードに乗ったテイルスの放ったミサイルだった。

彼は二本の尻尾を持った黄色の子ギツネで、ソニックの良きパートナーである。

「ソニック! 援護するよ!!」

テイルスは操縦席から笑顔を見せながら言った。

「THANKS!!」

ビッ!

ソニックはテイルスに親指を立てた。

「忌々しいのが二匹になりおったワイ! こうなったらフルパワーじ

や！！」

ガチャッ、ガチャッ！

ギュイ——ン！！

ロボットは変形しさらに大きくなった。

「へへっ、そうこなくっちゃ！」

ソニックは余裕たつぷりにほくそ笑んだ。

「その余裕もそこまでじゃ！覚悟しろい！！！」

ゴオオッ！！

ロボットのスピードが上がった。

「俺に追いつけるかな？」

バビュンッ！！

ソニックもさらにスピードを上げた。

「喰らえい！！」

[illegible]

ロボットの全身からミサイルやマシンガンなどが一斉に撃たれた。

「ユウ・ス
COOL!!」

ソニックは全て避けながら言った。

「くらえー！エッグマン！！」

ドンドン！！

ドガン！！

ティルスはエッグマンのロボットに二発、大きなミサイルを撃ち込んだ。

それらは見事に命中した。

「のわっ！？」

エッグマンはひるんだ。

「ハアッ！！」

ド——ンッ——！

その隙にソニックはロボットにホーミングアタックをした。

「きかぬわっ！——！」

ギユワァ——ン——！

バキィッ——！

ロボットは勢いよく回転し、ソニックを弾き飛ばした。

「うわぁっ——！」

ババッ——！

ソニックは空中で体制を整えて着地した。

エッグマンはテイルスの方を見た。

「貴様の相手はこいつじゃ！ポチッとな——！」

エッグマンは何かのスイッチを押した。

ドドドドドドドドドドドド！

エッグマンのロボットから膨大な数のミサイルや追尾弾が飛び出した。

「そんなものでやられるもんか！！」

グオオオ——ン！！

トルネードは大きく旋回した。

——こうして僕達がエッグマンと戦うのは何回目だろう…？

テイルスはトルネードを操縦しながらそう思っていた。

「さーで、次は貴様の番じゃあー！！」

エッグマンは再びソニックを追いかけた。

「COME ON!! COME ON!!」

ダッ!!

ソニックは逃げながら言った。

「ハッ!!」

シュンッ!!

ソニックの姿が消えた。

「なにいつ!? ソニックめ、どこへ消えた!?!?」

エッグマンは辺りを見回した。

「どこさっ!!」

頭上から声がした。

「むうつ!?!」

エッグマンが上を向いた。

ギューイイイイ——ン!?!

そこには回転しながら落下してくるソニック。

ドガ——ン!?!

「のわあっ!?!」

ソニックはロボットの頭上に回転しながらアタックした。

「まだまだじゃあ——!?!」

ギュー——!?!

ロボットは再び回転を始めた。

「ぐあっ!?!」

ソニックは再び弾き飛ばされた。

ババッ！

ドガァン！！

ソニックは空中で体制を整え、壁を蹴りもう一度ロボットにアタックした。

「きかぬと言つとるじゃろが！！」

ギユワ——！！

エッグマンはロボットを再び回転させ、ソニックを弾き飛ばした。

「うわぁっ！！」

ソニックは空高く弾き飛ばされた。

「ホ——ホホホ——！！ソニックよ！貴様を倒すために新しくつくったこの「E-Z」はそう簡単に倒すことは出来んぞ——！！」

エッグマンは高笑いをした。

「さあーで、どうかなあー？」

ソニックは空中で不敵に笑いながら言った。

「ふんっ、貴様は「E-Z」を倒すどころか傷一つすらつけておらんぞ！」

エッグマンは憎たらしく言った。

その時――

キラアッ…

ソニックの周りに赤、青、黄、緑、白、水色、紫の光が現れた。

「さーで、これはなんでしよう？」

ソニックはにやけながら言った。

「んなっ……き、貴様、まさかつ！！？」

エッグマンは叫んだ。

そう……ソニックの周りに現れたのは——カオスエメラルド。

ソニックは目を閉じた。

グオオオオオツ!!!

カオスエメラルドがソニックの周りを勢いよく回り始めた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

ソニックの体が徐々に金色になっていく。

「やった！スーパーソニックだ!!」

テイルスはミサイルを破壊しながら嬉々としてそう叫んだ。

シューオオオオオオッ!!

「ハアアッ!!!!」

ボワッ!!

ソニックはスーパーソニックになった。

「さあーで、遊んでやるぜエッグマン!!!!」
ソニックは宙に浮きながら余裕たっぷりに告げた。

「ぬおおおっ!!」
エッグマンは焦りだした。

SILVER VS DARK

一方その頃……ソニック達が戦っている場所から遙か離れた場所にある水の公国―「ソレアナ」に一匹のハリネズミが居た。

「……ああ――！今日も平和だな――！」

ソレアナの街から少し離れた浜辺で1人ねっころがりながら大きく伸びをした銀色のハリネズミ――シルバー・ザ・ヘッジホッグは一人呟いた。

雪のような銀白の毛皮に身を包まれ、ブーツを思わせる少し丈の高い靴が彼の気高さを彷彿とさせる。

ザザ――ン……！！

潮の良い匂いがする。

海の潮風が、彼の白い胸毛を揺らす。

その時――

「……………」

彼は異変を感じ、静かに目を開いた。

しかし周りに誰もおらず、目の前には半透明の海、空にはカモメが飛んでいるくらいだった。

「……………気のせいかな。」

そう呟き、再び目を閉じた時――

「……………違う、こいつもシャドウじゃない。」

突然聞こえた不気味な声にシルバーは体を起こし、周りを見回した。

「誰だ!?!」

シルバーは周りを見回しながら叫んだ。

「!？」

シルバーは上空に気配を感じ、空を見上げる。

「な、何だあれ!？」

気配のあるところに禍々しい黒い煙のようなものが集まった。

そしてそのまま一匹の漆黒のハリネズミになった。

「なっ!……お前は……メフィレス!!？」

シルバーは身構えながら言った。

確かにその姿はメフィレスに似ていた。

かつて荒廃した未来で自分を騙し、ソニックを殺させようとして全ての歴史の抹殺を企んだあの男

——「メフィレス・ザ・ダーク」に。

奴はイブリースと融合し、再び「過去・現在・未来」同時に存在する超次元生命体——「ソラリス」となった。

——だが、奴は俺とソニック、そしてシャドウと共に倒したはず。
なのに何故……？

フワッ……

漆黒のハリネズミは無言で海の上に舞い降りた。

「……メフィレスとは誰の事だ？俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジ
ホッグだ。」

そのハリネズミ——ダークは静かに言い放った。

「……この世の絶対にして究極の存在だ。」

「……それで、その究極の存在が俺に何の用だ？」

シルバーはダークを睨みつけながら言った。

「貴様に用は無いが……折角だ。俺の力を見せてやろう。」

シュオオオオオオ!!

ダークの周りに黒い霧が吹き出した。

「!？」

ジャキ――

霧はそのまま数本の大きく鋭い槍になった。

「……消える。」

ビュンッ!!

槍が一斉にシルバーに襲いかかった。

「無駄だ!!」

シルバーは両手を前に突き出した。

ピタッ！！

槍は全てシルバーの周りで青白く光り、静止した。

「……………ほう。」

ダークは微かに驚いた表情を見せた。

「俺の超能力をなめるなよ！お返しするぜ！！」

ビュンッ！！

グオオオオオッ！！

シルバーがダークに向かって腕を振ると槍は全てダークに向かって飛んでいった。

ガキンッ！！キンッ！！

しかし、槍は全てダークの目の前で弾かれてしまった。

「なっ、何！？」

シルバーは驚き目を見開いた。

「これでどうだ！」

バツ！

シルバーは大きく跳躍した。

「くらえっ！！」

バリバリッ！！

シルバーはダークの近くに着地し、周りにサイコネシスを放った。

バシュンッ！！

それは命中したものの、ダークは表情一つ変えずに浮かんでいる。

「……なかなかやるようだが、そんな程度で俺を倒す事は不可能。」

「なっ！？」

シルバーは自分の目を疑った。

「もついい……消える。」

静かに言い放つと、ダークは片手をシルバーに向けた。

グオオオオオオオオオオオオ！！！！

ダークの掌に黒い光が集まってきた。

どれほど強い威力を発揮するのは、その光の大きさを見れば一目瞭然だった。

その余派がダークの足元の海水を大きく揺らしている。

「くつ、くそつ！」

まずい、やられる——！！

シルバーは防御体制に入り、目を閉じた。

その時——

ギューウウウウウウ………ン

ダークの強大で禍々しいオーラが徐々に薄れていくのを感じた。

「……？」

シルバーは徐に目を開けた。

「……………」

ダークは無言で海の彼方を見つめている。

「……あつちに大きな力が……この力はカオスエメラルドか……？」

「カオスエメラルド………だと？」

シルバーは思わずそう尋ねた。

ダークはシルバーの方に向き返した。

「……今回は見逃してやる。次会った時は容赦無く消す。」

ギユウウウン！

そう告げるとダークはゆっくり上昇した。

「ハアッ！！」

ドシュッ！！

ダークは遙か彼方に飛び去っていった。

「……なんだっ たんだあいつは……？」

シルバーは呆然としたまま、そう呟いた。

「カオスエメラルド……何か嫌な予感がするが、このまま奴を放っておくわけにはいかない。」

ボワアッ……！！

シルバーの体が青く光った。

ふわぁっ
……

そしてそのままシルバーの体がゆっくりと宙に浮かんだ。

「ハアッ!」

シュンッ!!

そして、そのままダークの消えた方へと猛スピードで飛び去っていった。

SILVER VS DARK（後書き）

この話は「新ソニ」が終わってから約一週間程経った頃という設定で読んで頂けたら嬉しいですよ。

原作では「ソラリス」を倒した後はシルバーはもう未来に帰っていますが、今作ではシルバーはまだ未来に帰っていない設定です。

理由はご想像にお任せします（笑）

STARTING OVER

戦いの場は再びエッグマンの基地に戻る……。

「どうしたエッグマン？さっきまでの威勢はどこ行った？」

スーパーソニックは宙に浮かびながら余裕たっぷりと言った。

「ぐ、ぐぬぬ……」

エッグマンは悔しそうな表情を見せている。

カオスエメラルドの力を使いパワーアップしたスーパーソニックは、エッグマンのロボットを圧倒的な力で攻撃し続けた。連続攻撃を受け、ロボットは既にボロボロであった。

「このまま一気に終わらせてやる……！」

ソニックは叫んだ。

「く……く、くそ——！またしてもワシの計画を邪魔しおって——
！——」

エッグマンは最早なす術がなかった。

????????????

その頃、ソニック達の居る場所より遙か上空に一匹のハリネズミが居た。

「……シャドウに似ているがシャドウじゃない。奴は一体何者だ……？まあいい、どうやら奴はカオスエメラルドの力でパワーアップしたようだな。俺の力でちょっと遊んでやるか。」

スッ――

ハリネズミ――ダークは静かに片手をソニックに向けた。

そんなダークの姿に気づきもしないソニックは、エッグマンに最後
に人差し指を立てた。

「覚悟しな、エッグマン!!!!」

ドンッ!!

ソニックは一気に力を開放した。

「くっ、もはやここまでか……」

エッグマンは目を閉じた。

しかし、そのまま何ら変化が起こることはなかった。

「……?」

エッグマンは静かに目を開けた。

シューウウウウウウ……

スーパーソニックの力が少しずつ弱まっていくなの分かる。

「ぐっ……ぐぐぐっ……!!」

スーパーソニックは苦しげな面持ちだった。

「ソニック、どうしたの？」

テイルスがトルネードの操縦席から尋ねかけた。

「ぐっ……体が……動かないっ……!!」

スーパーソニックは苦しそうに言った。

「えっ!？」

テイルスは尋ね返した。

ニイッ！

それを聞いたエッグマンの表情に笑みが浮かぶ。

「ホ——ホホ——！！情けないのうソニック！攻撃チャンスじゃ——！！」

ウィイイイン！

ロボットの片腕がゆっくり上がっている。

「やめる——！！エッグマン——！！」

ドガ——ン——！！

テイルスがミサイルを放ち、見事ロボットに命中する。

「ぎゃああ——っ——！！」

ガシャ——ン——！！

ロボットは体制を崩した。

「くう〜！邪魔な子ギツネめ〜！！」

エッグマンはギリギリと歯軋りしながら言った。

「大丈夫！？ソニック——ク？」

ソニックを振り返ったテイルスは驚いて声が出せなかった。

ソニックは頭を抱えている。

「ぐっぐっ！うおおおおおおっ！！！！」

ピカ——ン！！

スーパーソニックの叫びと共にソニックの体から七つのカオスエメラルドが抜け、本来の青いハリネズミの姿に戻った。

「なぬっ！？」

ソニックと対峙しているエッグマンすら自らの目を疑った。

ドサッ！

ソニックは地に落ちその場に倒れた。

「ハア——ハア——」

ソニックは両手両足を地面に付けたまま荒呼吸をしている。

コオオオオッ

そして上空には異様な光を放つカオスエメラルドが浮かんでいた。

「何がどうなっておるのじゃ？！」

エッグマンがそう言った瞬間

ギューイ——ン！

ズガアッ！！

カオスエメラルドは肉眼ではとらえられないほどの速さで凝結し、エッグマンのロボットを貫いた。

「やつ——やっぱりこうなるのね……」

涙ながらに嘆くエッグマンのもとで

ドガ——ン！！！！！！

ロボットは爆発した。

「のわああああああああああああああ……！！！！！！！！！！」

エッグマンは遙か彼方に弾き飛ばされた。

T A R G E T

「んなつ!？」

ようやく呼吸が整ったソニックは驚いていた。

——なんだっ たんだ……？

そう思いながら分裂し七つに戻り、まとまらない動きで浮揚する力
オスエメラルドに近寄った。

その瞬間

ピカアッ!!

カオスエメラルドが眩い光を放った。

「っな!?!」

ソニックは思わず足を止めた。

「ソニック、危ない!!」

ヒュンッ!

テイルスが叫んだ瞬間、カオスエメラルドの一つが猛スピードで突っ込んだ。

「のわっ!?!」

バッ!

ソニックはギリギリでそれをかわした。

「くっ、SAFE!」

バッ
バッ!!

ソニックは大きくバックステップをし、カオスエメラルドから離れた。

「ど、どうなってんだ？」

コオオオオツ――

異様な光を放ち続けるカオスエメラルドに視線を投げかけながらソニックは呟いた。

ヒュッ！

そして再び一つがソニックに襲いかかった。

「くっ！」

ソニックはまたもギリギリでかわした。

「くそ、何てスピードだ！」

バツ！

再び大きくバックステップをしながらソニックは苦々しげにそう呟いた。

「ソニック、乗って——!!」

トルネードがソニックに近づいてきた。

その時——

ピカアッ!!!

カオスエメラルドは再び強い閃光を放った。

「ま、マズい!!! テイルス! 来るな——!!!」

ソニックは叫んだが——最早手遅れだった。

バキィッ!!

カオスエメラルドが再び肉眼で見えないほどの速さで凝結し――
――トルネードを貫いた。

「なっ!!?」

ヒュルルル――

ソニックの叫びと共にトルネードは回転しながら墜落し、

ドガ――ン!!!!

そのまま爆発した。

「テ、テイルス――!!!!!!!!」

ソニックは叫んだ。

墜落した所から大きな黒煙がもくもくとあがっているのが分かる。

ドガァッ!!

「ぐあっ!!」

トルネードの墜落に気を取られている隙に、カオスエメラルドのつがソニックの腹に猛スピードで突っ込んだ。

「ぐっ!!」

ソニックは腹を押さえながら片膝をついた。あまりの激痛に一瞬頭が真っ白になった。

「く……このままじゃやられる——!!」

ソニックがそう思った瞬間——

ビュンッ!!

「のわあっ!?!」

黒い影が突然現れ、ソニックの腕を掴んだ。

そのまま猛スピードでどんどんカオスエメラルドから遠ざかって行く。

「だ……誰だ?」

空いている方の手で痛みが取れない腹を押さえながら、ソニックは自分の腕を掴んでいる者を見た。

ソニックの腕を掴みながら音速で走る……いや滑走する者の正体は……

「お前は——シャドウ!?!」

彼に瓜二つの黒いハリネズミ——シャドウ・ザ・ヘッジホッグだった。

「……………」

表情一つをも変えることなく、シャドウは無言で滑走し続けた。

バツ！！

シャドウは大きく跳躍し、エッグマンの基地から脱出した。

ストツ――

軽やかに着地し、そのまま再び滑走しはじめた。
その地を滑る音は、まるで氷の上を滑るアイススケートの様な音だった。

基地から大分離れた所でシャドウは徐々にスピードを落とし、

ドサツ！

「おわっ！」

シャドウは乱暴にソニックの腕を離した。

ソニックはバランスを崩し地に倒れた。

「……………」

ドシュッ！

相変わらず無口のままシャドウは猛スピードでどこかに走り去り、あっという間に姿が見えなくなった。

「シャドウ……」

ソニックはシャドウの消えていった方向を見ながらそう呟いた。

????????????????

「…………くつくつく…………ハ——ッハッハッハ——！！！」

上空からソニック達を見下ろしていたダークは突如高笑いをした。

「とうとう見つけたぞ……シャドウ・ザ・ヘッジホッグ!!!!!!!!!!」

ドギョーンッ!!

ダークは目にもとまらぬ速さでシャドウを上空から追跡した。

“ ONLY ” VS “ ULTIMATE ”

「なにいつ！？ティルスが！？」

ソニックから一部始終を聞いた赤いハリモグラ——「ナックルズ・ザ・エキドゥナ」は驚き目を見開いた。

ソニックはあの後ナックルズを訪ねていた。

とある特別なエメラルドを守りながら暮らすナックルズはソニックの昔からの喧嘩友達であり、良きライバルである。

ナックルズの住んでいる場所は森の中にある、少し神秘的な感じを受ける場所だった。

そんなナックルズの問いかけにソニックは目を閉じながらゆっくり頷いた。

「……………くっ！！」

ナックルズはソニックに背を向けた。

「暴走したカオスエメラルドを止めるためにマスターエメラルドが

要るんだ。貸してくれないか？」

ソニックは尋ねた。

カオスエメラルドの暴走を止める力を持つマスターエメラルド――

――あれを使えばカオスエメラルドを止められるかもしれない。

ソニックはそう考えていた。

「……………」それがな……………」

ナックルズはソニックに背を向けたまま話を続けた。

????????????????

シャドウは荒野を滑走していた。

見渡す限り茶色っぽい風景が広がっている。

周りは茶色く大きな岩がゴロゴロ転がっており、植物は見当たらず生物の気配は無かった。

「……………」

シャドウは滑走を続けると同時に——「何か」の気配を感じていた。

——キッ！

シャドウは急に立ち止まった。

バツ！

振り返ったが、そこには相変わらず茶色い風景が広がっているだけだった。

「さっきから僕のあとをつけているのは誰だ？」

彼はまるで独りごとの様に呟いた。

「……………」

シャドウは遙か上空を見上げた。

澄んだ青空に様々な大きさの白雲が散らばっている。

スッ――

シャドウは片腕をもう片方の肩の方に伸ばした。

ババババッ！！

シャドウの手に黄色い光が集まる。

ビュンッ！！

「カオススパア！！」

シャドウが遥か上空に向かって腕を振ると、その手から黄色い光の矢が勢いよく放たれた。

ドドドッ！！！！

光の矢は何も無いはずの上空で何かに当たり爆発した。

空は灰色の煙に満ち溢れた。

「！？」

徐々に煙が引いてきたところでシャドウは驚いた表情を見せた。

「……ほう、俺に気づくとは……流石だなシャドウ。」

煙の中から宙に浮遊する黒いハリネズミが現れた。

「メフィレス……？いや違う。君は誰だ？何故僕を知っている？」

シャドウは黒いハリネズミに人差し指を向けながら尋ねた。

スッ――

黒いハリネズミはゆっくりと下降し、地に降りた。

「……俺はダーク。ダーク・ザ・ヘッジホッグだ。この世で唯一の究極の存在だ。」

そしてゆっくりと告げた。

「……何だそれは。僕の真似のつもりか？」

シャドウは蔑むように言った。

「……いや、真似などでは無い。これから貴様を殺し、俺が真の究極生命体になるのだから……」

「……何だと？」

シャドウは気にもとめるようなこともせず、静かに聞き返した。

「……貴様に手加減は要らないな。最初から全力でかかせてもらおう。」

スッ――

ダークがゆつくり両腕をシャドウに向けた。

「……君が僕に何の用だが知らないが、今殺されるわけにはいいい。

こちらもこの究極の力――全力で行かせてもらっぞ。」

シャドウも身構えた。

10mほど離れた場所で対峙している二人の間に鋭い沈黙が走る。

ヒュオオオオオオオオオッ！！

そして二人の間に一風の風が吹いた。

ドンッ！！！

二人は一気に力を開放した。

シャドウは神々しい金色に光り、ダークは禍々しい闇色に光った。

「ハアッ！！」

ドンッ！！

ダークの両手から黒く巨大な閃光が放たれた。

バッ！

シャドウは大きく跳躍し閃光をかわした。

ドガ——ン！！！！

閃光は地に突き刺さり、巨大な穴を開けた。

シュバッ！！

シャドウは宙で蹴りの体制をとると、ダークめがけて勢いよく急降下した。

ドガッ！！

鈍い音が響く。

「チッ！」

シャドウは舌打ちをした。

シャドウの重い一撃を、ダークは軽々と片腕のみで受け止めていた。

「無駄だ！」

バキッ！

ダークは無造作にその腕を振り、シャドウを弾き飛ばした。

ズザッ！

ドンッ！

シャドウは空中で体制を整えてから着地し、一気にダークに肉薄した。

ドガッ！！

シャドウがダークに回し蹴りをしたが、またしてもダークの腕にガードされてしまう。

「ハアアッ！！」

ドガアッ！！バキッ！！ドゴオッ！！

シャドウはそのままダークに凄まじい速さで攻撃ラッシュを続けた。

しかし、全てガードされてしまう。

バッ！

「なにっ！？」

シャドウがダークの顔めがけて手刀を放ったが、かわされた拳がその腕を掴まれた。

「タアッ！！」

シュバツ!!

ダークはシャドウを思い切り上空に投げ飛ばした。

「クッ!」

シャドウは再び宙で体制を整え、地上にいるはずのダークの方を見た。

「!?!」

しかしそこにダークはいない。

「——こっちだ。」

頭上で声がした。

「!?!」

顔を上げたシャドウは自らの目を疑った。
そこに両腕を頭の後ろで組み、振り上げているダークがいたためである。

バキィッ!!

「ぐあつ!!」

ダークは両腕を振り下ろし、シャドウを地上に叩き落とした。

スタツ!

シャドウは無事に着地し、ダークを睨みつけた。

バッ!

「カオススパア!!」

ドドッ!!

シャドウは再び光の矢をつくり、ダークめがけて放った。
再度それは命中し、宙で爆発を起こした。

煙が引いてくると、防御体制でかまえているダークの姿が臃氣にだ
が露になった。

そんなダークを、シャドウは静かに睨みつけていた。

「……今度はこっちから行かせてもらおう。」

ドンッ!!

ダークは空中から一気にシャドウに肉薄した。

「喰らえ!」

ダークはシャドウの顔にパンチした。

ガッ!!

シャドウはそれをガードした。

「まだまだだ。」

バババババババツ!!!

ダークは目にも見えぬ速さでシャドウに連続的にパンチをした。

ガガガガガガッ！！

シャドウは再び全てガードした。

「フッ、面白い。」

バッ！

ダークは一度シャドウから離れ、距離をとった。

「ハアッ！！」

二人は同時に叫び、一斉に肉薄した。

シュンッ！

そして二人が衝突する瞬間、双方の姿が消えた。

ドガンッ！！

虚空で大きな鈍い音が響く。

ドドドドドドッ！！！

鈍い音はその後数回に渡って響き、宙に衝撃波となっては消えた。

そう、二人が宙で打ち合いしているのだ。肉眼では見えないほどの速さで――。

音速を超えるそのスピードに姿を確認することが出来ない。

パッ！

再び二人の姿が現れると、互いに距離をとった。

スタッ！

二人は同じタイミングで着地した。

再び二人の間に沈黙が走る。

「……流石だな。だがこうでなくては面白くない。」

ダークが表情一つも変えず、静かに告げた。

「……」

シャドウは何も言わず、ただダークを睨んでいる。

「……一つ面白い物を見せてやろう。」

スッ――

ダークは静かに片腕を空に向けた。

「……？」

シャドウは空を見た。

遥か上空から何かが降りてくる。

その数は七つ。

「バカな……カオスエメラルドだと!？」

シャドウは叫んだ。

「……そう、カオスエメラルドだ。
こいつは俺の好きな様に動く……この様にな。」

スッ――

ヒュッ!

ダークが腕をシャドウに向けると、カオスエメラルドの一つがシャドウに猛スピードで突っ込んだ。

「クッ!」

シャドウはギリギリでかわす。

「!?!」

その刹那、ダークがシャドウに肉薄した。

バキィッ！！

「ぐはぁっ！！」

そのままシャドウを殴り飛ばした。

ズザザザアッ！！

シャドウは地面に叩き付けられた。

「……………」

シャドウは立ち上がるが、再びカオスエメラルドがシャドウに襲いかかる。

「……………さあ、どうするシャドウ？」

ダークは悠然としてシャドウに問いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2548y/>

ソニック・ザ・ヘッジホッグ「エメラルドの暴走」

2011年11月21日10時59分発行